

陸軍航空

空爆で全員戦死の噂あつた清野分隊

山形県 清野 弁 司

私の生い立ち

大正十一（一九二二）年八月十日、現住地で体重一貫匁（三・七五キロ）ほどの丸々太つた農家の長男として産声をあげ、家族はもちろん、親戚や町内の皆様から、百姓の跡取りが出来たと祝福され、盛大に誕生祝いを行つたと聞いております。

入隊時の家族

祖父明治九（一八七六）年生れの六十七歳。祖母明治十一年生れの六十五歳。父明治三十年生れの四十六歳。母明治三十三年生れの四十三歳。妹

昭和二（一九二七）年生れの十五歳。弟昭和四年生れの十三歳。妹昭和十二年生れの五歳、以上八人家族で、当時は普通の家族構成でしたが、現在では大家族です。

入隊前の履歴

当地の尋常高等小学校卒業と同時に青年学校に入學しました。青年学校の教育は一般的な学問もありましたが、主として軍事訓練で、教官は軍隊で鍛えられた戦地からの復員軍曹で、戦場と変わらぬ訓練の毎日でした。

軍隊から払い下げられたと思われる銃を担がされ、射撃訓練、長距離行軍、敵軍と遭遇した場合の対応等、今思えば入隊後の訓練に増すとも劣らぬ訓練でした。

私は器楽に興味ありましたので、喇叭手として進軍喇叭をはじめ起床、就寝喇叭等軍隊ながらの教育を受け、学校では「清野喇叭手」の愛称で呼ばれておりました。

でも、教官から「清野、お前体格が良いので徴兵検査で甲種合格間違いないから、入隊しても決して喇叭手を希望しては駄目だぞ」と言われました。「なぜですか」との私の問いに教官曰く「喇叭手は進級が遅い、お前も知っているだろう、あの有名な死んでも口から喇叭を離さなかった喇叭手でさえ戦死後の上等兵だよ」との返事でした。加えて「お前は、学校の成績抜群で下士官に絶対になれるから頑張れよ」と身に余るお褒めの言葉と励ましをいただきました。

家族は農家といっても中農家で、田地一町五反歩、畑地一反歩、田地はもちろん水稲、畑地は自家用の野菜が主で、余分の野菜は小売店へ卸して生活しておりました。

友人は都会へ出稼ぎに出て、盆・正月には大金

を持ち帰り、自慢して私にも出稼ぎを奨めました。が、年老いた祖父母の農作業をみているとどうしても家から離れることが出来ず、祖父母・父母の農作業を手伝って細々と生活しておりました。

私の愛するふるさと

私の故郷大江町は、山形市で佐沢線に乗り換え、終点佐沢駅で下車（所要時間四十五分）します。

主要産物は米・林檎・葡萄・桜桃・西瓜・洋梨（ラ・フランス）等です。とくに林檎は有名で青森・長野等他県産の林檎より糖度が一〜二度高く、横浜の親戚に送ったところ、今まで食べている林檎とは全く違うおいしさだといえます。そして愛犬までポリポリ食べている様子で、他県産の林檎を与えたが全く食べようとしないとのことでした。ラ・フランスは戦後山形県出身の元横綱柏戸関が山形県の名産品にと栽培を奨めたもので、今では山形県の名産品として全国的に知られるようになり好評を得ております。その他農産加工品では柳川手打ちそば・焼き鮎等があります。自然の名勝・

名所では神通峡・観光やな・朝日登山・横山公演
(日本一)・松保大杉等があります。

徴兵検査

昭和十七年七月、待ちに待った徴兵検査の日が
来ました。朝早く起きて風呂で身を清め、国民服
で身を包み、家族に見送られ検査場にと足を運び
ました。私が着いた時は誰も来ておりませんでし
たが、十分ほど経って同級生が現われ、定刻二十
分前には全員揃いました。

試験官から注意事項等の説明があり、私は中ご
ろに検査を受けましたが、医師の性病検査以外は
簡単に済まされ「良い体だ、甲種合格」と大声で
告げられました。

試験場を出て写真館に向かい記念写真を撮り、
夜小料理屋で会食を行いました。丙種合格の方
の喜び、二、三人の甲種合格の方のションボリ姿
を見て私は吃驚しました。聞いたことありませんが、
兵隊へ行きたくなくて醬油を毎日大量に飲んで、
青白く痩せ衰えて不合格になって喜んでいる者も

いるそうです。私には、このような非国民がいる
ことは理解できませんでした。

入 営

昭和十八年四月十日、青森県八戸市の第六航空
教育隊に入隊しました。青年学校で教官から指導
頂いたことを忘れず、喇叭手の経験も言わずに一
生懸命頑張る覚悟で初日の床に就きました。

一週間ぐらいは先輩から上げ膳、据え膳の待遇
を受けましたが、青年学校で教官から聞かされて
いた通り、否それ以上の、私的制裁が始まりまし
た。「軍人精神を入れてやる」などの訳の分から
ない理由を付け、左記のような理由付けしての私
的制裁でした。

- 一 弛んでいる
- 二 歩きが遅い
- 三 先輩に対する言葉使い、態度が悪い
- 四 内務班での出入の際の申告の声が低い
- 五 衾布が汚れている
- 六 軍靴の手入れが悪い

七 軍足の修理が悪い

八 銃の手入れが悪い

などです。

私的制裁そのものは

一 往復ビンタ

二 軍靴で造ったスリッパでのビンタ

三 満水の掃除用バケツを両手に下げて、三十

分ぐらい不動の姿勢で立たせられる

四 柱に上り蟬泣き

などでした。

同年兵は後六カ月経てば初年兵が入って来る。

それまでは「我慢、我慢」の合言葉で耐える約束をしていました。

私の隊の任務は地上警備ですので、一般の歩兵部隊と変わらない教育を受けました。すべてに耐えた六カ月間の教育も全員無事に終了して、一期の検閲を受けた翌日には初年兵が入隊、私はその教育助手を命ぜられました。私は初年兵には決して私達が受けたような私的制裁をやらぬことを

同年兵全員で誓い合い、初年兵に感謝されました。

年月日の記憶はありませんが、第六航空教育隊は解隊し、岩手県盛岡航空北部第九十七部隊に編入され、同部隊所属の教育隊の初年兵教育助手として勤務しました。

昭和二十年八月一日付けで福島県相馬郡の原の町特攻基地（現在全国に知られている野馬追が行われている「ひばりが原」）に転属し、特攻機の保全に従事しました。

毎日の作業は主として林野から伐採、刈り取った草木で特攻機を覆い、米軍からの発見を逃れるための作業でしたが、運悪く発見され、米軍機グラマン三十機からの爆撃を受け、我が特攻機は全滅しました。

この情報を受けた本隊の幹部が、被害確認のため現地へ視察に来たところ、特攻機と共に兵隊の姿が見えないので、清野分隊長以下十七人全員が敵機の爆撃により戦死と公表されました。しかしその矢先、全員無事で隊長の前に現れましたので、

隊長は驚きと喜びで涙ぐんでおられました。私達の生存が確認出来なかったのは、私達の本隊への通った道と、幹部の通った道が正反対方向だったからでした。

かくして任務遂行に務めましたが無事終戦の詔勅を拝聴し、無念の涙を呑んで武装解除となり、残務整理に従事し、戦後の混乱が続く中、昭和二十年十月、家族の元に帰りました。

復員後の職歴等

戦時中働き盛りの男性はすべて軍隊にかりだされ、老人と女性のみの農作業のため田地は荒れていました。食料不足で苦労している町民を見て、これは早期に農地の再興の必要性を感じ、軍隊での苦労からみれば楽なものだと復員翌日から、夜明けを待って働き続けました。

十一月末、当地は雪一色になり、農産物の収穫も終わりこれぞという仕事も無いので、冬期間出稼ぎして畑地を拡張し、林檎栽培をしようと決心しました。そして東京神田の青果市場の荷受け係

りとして臨時職員に採用され、ここで得た金で毎年土地を購入し、林檎の苗木を植え付け、七年間で現在の五反歩（約五千平方メートル）の林檎園に広げることができました。

現在は林檎の栽培と田畑の作業で多忙になり、出稼ぎも止め、専ら農作業一筋の毎日です。私は復員後の昭和二十二年、親戚の奨めで妻を娶り、二男二女をもうけ、現在長男夫婦は農作業並びに家計を切り回してくれ、円満で幸せな毎日を送っております。

また、私は趣味が多く、菊花づくり、老人クラブ副会長、尺八、民謡等で地域の皆様との新睦と交流を深めております。戦争の労苦、悲惨さを後世に伝えて、戦争は二度と繰り返さない日本であることを願う一人です。